

【一宮町社会福祉協議会長賞】

やなおか はるみ
柳岡 晴美

天国にいるお母さんへ

お母さんが天国に旅立ってから、2回目の冬がやってきました。

冬の夕暮れ、澄んだ空気の中に広がる燃えるように赤い夕焼けが好きで、

子供の頃、よく2人で窓から眺めていましたね。

部屋の中の石油ストーブが燃える赤い色も窓に写り、

寒い冬でも心の中はあったかだったことを思い出します。

私も50才もとういに過ぎたのに、昨年秋にお母さんが旅立ち、すぐに冬がきて、

寂しさと悲しさで押しつぶされそうになり、夕焼けを見ることもできなかったけど、

今年の冬は子供の頃を思い出しながら、また夕焼けを眺めることができました。

いつも自分の事より、家族のために働いてくれたお母さん、

80才を過ぎててもずっと頑張っていました。

今になって思うとお母さんの家族に対する愛情は、冬の夕焼けのように力強く、

でも暖かく、いつも私たちを包んでくれていたなと思います。

お母さんから受けた愛情の何10分の1もお母さんに返すことはできなかったけれど、

お母さんから教えてもらった強さ、優しさは私の中に生き、

そして私の子供にもちゃんと伝わっています。

これからは、私もあの夕焼けのように暖かく家族を見守れる存在でいたいです。

お母さん、これから先もずっとあの夕焼けの高い高い空の上から、

私たち家族を見守っていて下さい。

いつまでも甘えてばかりでごめんなさい。

(千葉県 / 55歳 / 女性 / 臨時職員)

母が活着ている時は、感謝の気持ちをなかなか口に出して言う事が出来なかったので、遅くなってしまったけれど、天国の母に届けばという想いで書きました。